

海流

時折り棹さして方向を見定めつつ
僕は流れに乗って悠々と流れ下っていった
「ああ、僕はこうして老いてゆくのだ」と
感慨深げに空を見上げながら・・・

流れに手を浸すのは心地よいことだった
ああ、何とゆったりした時の流れよ
ああ、何と豊かで優しい生活の流れよ

そして、私と同じように舟で下る人々は
幸福な微笑と共に僕に近づき、また離れ
そしてまた近づいてくる
僕はその度に舟と船を繋ぎ
彼らと酒を酌み交すのが好きだ
ああ、何と世界は優美なものか！

ただ、時折いくつかの例外に出会うこともあった
恋に狂う若者が流れをさかのぼろうと
恋人を見失うまいと無益に流れに逆らって棹さしていたり
運命の悪戯か、はしゃぎ過ぎかで転覆してしまった者たちが
水をたらふく飲みながら助けを乞う手を伸ばしていたり
ああ、しかしそれらはただ過ぎてゆくだけだった
僕の舟は順調に流れていた・・・

その時
僕はふと恐怖に襲われたのだ
この流れの果てに、やはり悠久の時の流れがあるのだろうか、と
僕は落ち着かず、舟の上を行ったり来たりした
なおも流れは僕を運んでいた
僕の意味とは何の関わりもなく・・・

辺りを見回しても陸は見えなかった
大海そのものが流れていた
ふと見ると、またもや流れに逆らって棹さす者が居た
その舟は飛ぶように過ぎていった
速度は増していた
今や計り知れぬほどに・・・

僕は気が付くと、棹を水底に突き刺していた
舟の舳先に、泡立ちながら流れはぶつかっていた
数度の失敗を繰り返したのち
僕は流れの中に停止していた
無数の哀しげな微笑が飛び過ぎていった
幸福という名の舟に乗って・・・

見上げる空には何も変わりはない
陽光は、流れと共に下っているときと同じく優しくあった
ただ、風が少し強く感じられたことと
流れのざわめきと力の強さが僕を威嚇した以外には何も変わりはない

変わっていたのは流れの上の景色だった
全ては飛ぶように過ぎていった
それは、ある時は僕の焦燥をかき立てた
取り残されたという孤独感をも

だが、ある者は僕に瑞々しいオレンジを投げてくれた
また、ある者は数日僕の舟に係留したりした
そんな時は、何にも増して素晴らしかった
彼らが何処へ行くのかは、既にどうでもよくなっていた
尤も、殆どの者が投げて寄越すのは
優越感、哀れみ、幸福への誘惑といった類だった

そしてまた、僕は流れに棹さしはじめた
ただし、今度は流れに逆らって棹さしていった
それは、彼らが見たという陸の話に刺戟されたためかもしれなかったし
流れの果てにあるものに対する恐怖の故かもしれなかった

ああ、それにしても何と世界は違っていたらう！
流れに身を任せていた時の世界とは・・・
今や、僕の胸の中には希望がふくらんでいた
流れの果てを想うのと同じほど空しいことかもしれないというのに・・・
そして、もしかしたら
僕は生そのものをも拒否したことになるのかもしれないというのに・・・

それでも、今や支配するものとなっていたことは確かだった
この流れを
そして、この世界を

(1991.6.28)